「私のイチバンボシ」第４話

水瀬真理佳

○高校・教室内

机と椅子が教室の後ろに寄せられている。

生徒が段ボールを切ったり、色を塗ったりしている。

えまと桃香、ジャージ姿で床に座って作業。

えま「あーあ。来年の文化祭までに彼氏作って心に決めてたのに……気づいたらあっという間に一年経っちゃった。ユニ担になったおかげで恋愛のことなんかすっかり頭から消えてた～」

桃香「えま、あの時は躍起になってたもんね」

えま「なってたなってた」

桃香「私は推しに恋しちゃってるからリアルな恋愛なんてもう無理かも。彼氏とか旦那さんいるオタクってどうしてんのかなぁ」

えま「私も無理だと思う……陽斗くん以外にドキッとしないし、キュンとしないもん！」

桃香「（真剣に）でも結婚はしたい！」

えま「（真剣に）それは分かる！」

桃香「あ〜！　二次元に行ける道具出してよエマえもん〜！　私を二次元に連れてってぇー」

と、えまに寄りかかる。

えま「桃香ちゃん、いい子いい子」

と、桃香の頭を撫でる。

桃香「いいな〜えまは。推しがこの次元に存在してるし。しかも同居してるし！」

えま「何度も言うけど、彼は陽斗くんであって、陽斗くんじゃないの！　うちにいるのは、アイドルの陽斗くんじゃなくて、田中陽斗さんっていう一人の人だから！」

桃香、聞き飽きた顔。

桃香「分かった分かった。百歩譲って、彼はただの田中陽斗だとしてもだよ？　顔も声も体も推し同じ、ていうか本人なんだからさ、ぶっちゃけ田中さん自身にキュンとかドキッとかないの？　するでしょ？」

えま「……そこはちゃんとわきまえてるか

ら！」

桃香「今確実に間があったね」

桃香、ニヤニヤしながらえまを見る。

えま、気付かないフリをして作業に戻る。

○ミラベル・店内（夜）

扉が開く音。

えま「いらっしゃいませ！」

変装をした陽斗が入って来る。

えま「（陽斗くん!?）」

陽斗、軽く手を挙げてレジの方に来る。

えま「（小声で）どうしたんですか？」

陽斗「今日の現場早く終わったからスイーツ食べに来た！　どれがオススメ？」

陽斗、ショーケースを眺める。

えま「そうですねぇ……一番人気はフォンダンショコラなんですけど……」

えまM「陽斗くんきっとコンサートに向けて体作ってるだろうし、糖質は極力控えめの

方がいいよね。となると……」

えま「チーズケーキはどうですか？　嫌いですか？」

陽斗「好きだよ！」

えま「うちのは砂糖を一切使ってない代わりにほんのちょっとハチミツを使って仕上げてるんです。だからダイエットとか体作ってる人にも人気で」

陽斗「じゃあそれにしようかな」

えま「ドリンクはつけますか？」

陽斗「今日はアイスコーヒーで！」

えま「950円になります」

陽斗、支払いをする。

陽斗「ねぇ、今日って店長さんいる？　この間のケーキのお礼言いたいんだけど」

陽斗、レジの方に身を乗り出して中を覗こうとする。

えま「店長今日お休みなんです」

陽斗「そっか……残念」

えま「一緒に食べた人が美味しいって言って

たって私から伝えておきますね！」

陽斗「うん、よろしく」

えま、陽斗にレシートを渡す。

陽斗「今日も終わるの待ってるよ」

えま、嬉しそうに顔で頷く

陽斗、レシートを持ってお渡しカウンターへ行く。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

えまと陽斗、一緒に中へ入る。

類「えまー！」

兄・宮本類（27）、両手に抱えたハイブランドのショップバッグを床に置いて走って来る。

えま「げっ！」

えま、類から逃げるようにテーブルの奥に回り込む。

類「げってなんだよ、げって！　久しぶりの再会なのに、ひどいなぁ」

えま「お兄ちゃんなんでいんの!?」

類「出張でしばらく日本にいるんだ」

えま「（嫌そうな顔で）えぇ……まさかうちに泊まるの？」

類「俺の家はここなんだから、当たり前だろ！」

陽斗、えまの方に行く。

陽斗「お兄さん？」

と、類に手を向ける。

類「お兄さんって呼ぶなお兄さんて！　君のお兄さんになった覚えはない！　なる予定もない！」

えま、呆れながら、

えま「はい。普段はアメリカに住んでて」

類「（ドヤ顔で）君が必ず毎日使ってる、なくなったら困る、日本が世界に誇るアレの市場を動かしてるんだよ。何か分かるかな？」

陽斗「（作り笑い）な、なんでしょう……」

えま「気にしないでください。ただの便器売りです」

陽斗、「へぇ」という顔。

類「えまぁ！　その言い方は棘があるぞ！」

陽斗、類の方に行く。

陽斗「はじめまして。ユニクランの田中陽斗です。しばらく居候させていただいてます」

と、頭を下げる。

類、陽斗を値踏みするように上から下までじっくり見る。

類「えまの兄の宮本類だ。君かぁ、えまをたぶらかしてるのは！」

陽斗「た、たぶら……？」

えま「あぁもう。お兄ちゃんそういうのほんとにやめて！」

と、陽斗の方へ行く。

えま「陽斗くん、相手にしなくていいですからね？　お兄ちゃんと、お父さんもそうだけど、この人たちに攻略法は無視一択です」

えま、リビングを出ていく。

類「え？　今陽斗くんって言った？　陽斗くんって聞こえたけど？　なに、二人は名前

で呼び合う仲なわけ？　お兄ちゃん聞いてないぞ!?」

類、えまを追いかける。

陽斗「ほんとだ、社長そっくり」

と、苦笑する。

○同・リビングダイニング（夜）

宮本と美香と類と陽斗がリビングソファに座ってワインを飲みながら談笑している。

類「居候が俺の部屋使って、俺がゲストルームなんてひどいよ母さん」

類、ナッツをつまみながら不貞腐れる。

美香「類の部屋は定期的に掃除してシーツも変えてたからそっちを使ってもらうことにしたの。まさかあなたが突然帰って来るなんて思わないもの」

陽斗「俺が急に来ちゃったせいなんです。ほんとすみません。今からでも全然部屋出るんで」

と、申し訳なさそうにする。

類「そーだそーだ！」

美香「陽斗くんは全然気にしなくていいの。この子言いたいだけだからほっといて。無視が一番よ。無視してればそのうち静かになるから」

陽斗、フッと笑う。

美香「どうかした？」

陽斗「いや、えまちゃんも同じこと言ってたのでおかしくて」

宮本と類「えまちゃん……？」

宮本と類、陽斗を睨む。

陽斗、しまったという顔。

類「そうなんだよ父さん！　えまとコイツ、名前で呼び合ってるんだよ!?」

美香「名前で呼ぶ以外一体どうやって呼ぶのよ」

美香、類の膝を叩く。

宮本「まぁ、名前の件はさておき。陽斗は今やドラマにも引っ張りだこの超人気アイド

ルだから、大目に見てやってくれ」

類「……知ってる。それくらいじゃなかったら、いくら父さんの事務所のアイドルでも追い出してたよ」

スリッパのガサっという音。

四人が振り向くとえまが立っている。

えま「今の話……陽斗くんがパパの事務所ってなに……？　どういうこと？」

美香と類、しまったという顔。

宮本「いや、な……」

宮本、慌てる。

陽斗、困惑する。

えま「パパは人材派遣会社の社長って言ってたよね？　なに、パパS・Sの社長なの？」

えま、嫌悪の表情で宮本を見る。

宮本「えま、違う。これには事情があってな？」

えま「この感じだと知らなかったのは私だけなんだね。みんなしてサイッテー！」

えま、怒ってリビングを出ていく。

美香、困った顔をする。

類「あちゃー。これはマズったな……」

陽斗「どうしてえまちゃんにだけ秘密に……？」

類「君も分かると思うけど、知名度があるものには、称賛の声だけじゃなく当然非難もつきものだ。家族がその標的になってるのを見て良い気はしないだろ？　えまはまだ小さかったし、巻き込んで傷ついたりしないように念のため、な」

陽斗「なるほど……」

○同・えまの部屋（夜）

えま、力強くドアを閉めてベッドにダイブする。

スマホで【S・Sエンターテインメント　社長】と検索。【代表取締役　宮本徹】と出てくる。

えま「思いっきり書いてあるじゃん……こんなことに気づかなかったなんて、私バカだ

…」

えま、枕に顔を埋める。

○同・洗面所（早朝）

陽斗、鏡の前で歯を磨いている。

鏡越しに制服姿のえまが廊下を通るのが見える。

陽斗「え？　まだ四時半だよ!?」

陽斗、洗面所から顔を覗かせて声をかける。

えま「（元気なく）…おはようございます」

と、歩いて行く。

陽斗「おはよ……」

陽斗、廊下に立ちつくす。

○同・キッチン（朝）

美香、食器を洗っている。

陽斗「俺やります」

と、美香の隣立つ。

美香「でも時間大丈夫？」

陽斗「はい、まだ大丈夫です」

美香「じゃあお願いしちゃおうかな。食洗器の中の食器を棚に戻してくれる？」

陽斗「了解です」

陽斗、食洗器から丁寧に食器を取り出して後ろの棚に仕舞っていく。

陽斗「えまちゃんまだ怒ってますか？」

美香「そうなのよ。さっきもなんかいつもよりすごい早く学校行っちゃたし。これはしばらく時間がかかりそうね」

陽斗「……意地悪じゃないってことは、頭では分かってるんですけどね。でも自分にも自分なりの譲れない気持ちがあって。引くに引けない、みたいな。そんな感じですよね、きっと」

陽斗、マグカップを見つめながら呟く。

美香「陽斗くんもそんな経験あるの？」

陽斗「はい。俺は芸能界入ることで父親と最後まで揉めました。静かなる戦いでしたけど」

美香「スカウトだったんだっけ？　前にえまが話してた気がする」

陽斗「そうなんです。思春期真っ只中で、最初はカッコつけて『絶対やらねぇ』とか思ってたんですけどね」

陽斗、フッと笑う。

美香「親の心子知らずなんて言うけど、子供だって色々考えてるもんね」

陽斗「ですね」

美香、水道の蛇口を止める。

○ミラベル・店内（夕方）

えまと桃香、端の二人席に座ってドリンクを飲む。

桃香「そっか、だから田中さんが突然えまの家に住むことになったんだ……なるほど、全てに合点がいった。まさかえまのパパが私でも知ってるあのS・S事務所の社長さんだったとは」

えま「そう。それをパパもママも兄ちゃんも、

みんな私に隠してたんだよ!?　怒って当

然だよね？　私、何も間違ってないよね？」

桃香「それは確かにえまが可哀想」

桃香、頷きながらストローを回す。

綾乃「どうしたのえま。珍しくイライラして」

綾乃がスコーンを持ってくる。

えま「せんぱーい！」

綾乃「これ、店長から」

と、スコーンを置く。

えまと桃香、カウンターを振り返り舞

に会釈する。

舞、手を振る。

えま「私、家族にお父さんの職業ウソつかれ

てたんです！　普通にひどくないですか!?

知らなかったの私だけなんですよ！」

綾乃「えぇ？　ごめん、思ってたのとちょっ

と違って状況飲み込めないんだけど。そん

なことある？」

えま「それがあるんです！　私のこと、そん

なに信用できなかったのかなぁ」

綾乃「なんで隠してたか、理由は聞いたの？」

えま「それは聞いてないですけど……」

綾乃「（しょうがないなぁ）理由もなくそんなことはしないだろうし、事情くらい聞いてみれば？　それでも納得できなければ、怒っていいと思うよ」

桃香「私もそう思う。とりあえず、帰ったらちゃんと話した方がいいよ」

えま「うーーん……」

えま、不満そうに口を尖らせる。

○宮本家・廊下（夜）

えまが廊下を歩いていると宮本が帰って来る。

えま、無視して部屋に入ろうとする。

宮本「えま！」

えま「……」

えま、ドアノブを掴んで手を止める。

宮本「仕事のこと、隠してごめんな。でもえまを信用してないとか、そういうつもり

じゃなかったんだ。表に出ると、それだけ良くも悪くも目立つ。そのせいでえまが傷ついたりするのは嫌だったんだ。自分は大丈夫と思ってても、ネットとかに書かれた悪口を見るのは気分いいものじゃないからな。えまなら分かるだろ？」

えま「……うん。それは分かってる」

えま、部屋に入る。

宮本、困った顔でため息をつく。

○同・キッチン～リビング（夜）

陽斗、棚からマグカップを二つ取り出す。

リビングに目を向けると、えまがソファに座ってクイズ番組を見ている。

陽斗、マグカップを持ってえまの隣に座る。

陽斗「はい。俺特製のハチミツレモン」

と、えまにカップを渡す。

えま「……ありがとうございます」

テレビの声「親のほにゃらら子知らず。親のほにゃらら子知らず。空欄には漢字一文字が入ります」

陽斗「あ〜これなんだっけ……」

と、顎に手を置いて考える。

えま、陽斗の方をチラッと見る。

陽斗「（わざと）あ！　分かった。親の顔子知らずじゃない？」

えま、プッと笑う。

えま「陽斗くん新しいことわざ作り出してます」

陽斗「あれ、違うっけ？」

えま「親の心子知らずですよ」

陽斗「あー！　それだ！」

テレビの声「正解は親の心子知らず」

陽斗「さすが現役の学生！　えま頭いいんだ！」

と、拍手する。

えま「なんか気を遣わせてすみません。大丈夫ですよ私」

陽斗、真面目な表情で、

陽斗「えま。社長のこと黙っててごめん」

と、頭を下げる。

えま「きっとパパが頼んだんだろうし、陽斗くんが謝ることじゃないですよ」

陽斗「……俺が口挟むことじゃないのは分かってるんだけどさ。そろそろ許してあげてほしいな、社長たちのこと。俺、和気藹々とした宮本家が大好きだから、今ちょっと寂しい」

えま「私のためを思ってそうしてくれたってというのは分かってます。分かってるけど……」

陽斗、昔の自分を見るような眼差しで、

陽斗「それがちゃんと分かってるえまはすごいよ。俺なんてひどいもんだったよ、ほんと」

えま「（興味を示す）？」

○（陽斗の回想）中学校・グラウンド（夕方）

サッカー部がゲーム試合をしている。

陽斗（15）、ボールを蹴りながら生き生きと走る。

陽斗M「小さい頃から運動神経は人よりいい方で、サッカーばかりしていた典型的なサッカー少年だった。サッカー選手になりたいと思っていたわけではなかったけど、このままきっとサッカーを続けて、将来はそういう仕事ができるもんだと。今思えば甘い考えの中学生だった」

グラウンドの周りにはたくさんの女子。

女子「田中くん頑張れー！」

陽斗、シュートを決めて部員とハイタッチする。

女子から黄色い歓声が上がる。

井上「ナイス陽斗！」

陽斗「イエーイ！」

陽斗と井上健人（15）、ハイタッチする。

陽斗M「都大会に行けるくらいには強かった俺の中学は、それなりに知名度もあったし、

その中でも健人と俺はツートップと言われていた」

○（陽斗の回想）同・部室（夜）

生徒が練習から戻って来る。

男子「それにしてもさすが健人！　あんな強豪校からスカウトくるなんてな！」

男子、興奮しながら井上の肩を組む。

井上「俺も驚いてる。ありがとな！」

陽斗「ほんと、おめでと！」

と、精いっぱいの笑顔で言う。

井上「サンキュー！　同じチームもいいけど、試合でぶつかるのも絶対楽しいよな！　今からワクワクしてきた！　陽斗もサッカー続けるだろ？」

陽斗「あぁー。うん、できたら！」

と、気まずそうに笑う。

陽斗M「健人は、二人で行きたいと話していた強豪校からスカウトがきた。選ばれたのは、健人だけだった……」

○（陽斗の回想）渋谷・センター街

たくさんの人が行き交う。

陽斗、友達と歩いている。

宮本「ねぇ君。ちょっといいかな？」

宮本（39）が声をかける。隣には後藤孝弘（24）もいる。

陽斗、後ろを振り向く。

陽斗「……はい」

宮本「君、アイドルにならない？」

陽斗、後藤から名刺を受け取る。

友達「これスカウトじゃね？」

と、陽斗の耳元で話す。

後藤「良かったら話だけでもどうかな？」

陽斗、名刺を見て握りしめる。

陽斗「すいません。そういうの大丈夫です」

と、歩き出す。

友達「おい！　陽斗！」

友達、宮本たちを気にしながら陽斗を追いかける。

宮本「気が変わったらいつでも連絡しろよ

ー！」

宮本、ニヤけながら二人の背中に向かって叫ぶ。

陽斗、握りしめた名刺をポケットに突っ込む。

陽斗M「俺に来るスカウトは、胡散臭い芸能系のものくらいだった」

○（回想）田中家・リビング（夜）

母・田中理子（44）、葵（19）、陽斗がテーブルを囲んでお菓子を食べている。

陽斗、立ち上がって部屋に戻ろうとする。

ポケットから落ちた紙屑を葵が拾う。

葵「陽斗、なんか落ちたよ」

葵、名刺を見て、

葵「え！　どうしたのこれ！　S・Sの名刺じゃん！」

と、興奮する。

理子「何？　どうしたの？」

葵、理子に名刺を見せる。

理子「ほんとだ……S・Sエンターテインメントって書いてある。陽斗どうしたのこれ」

陽斗「……今日渋谷行ったら声かけられて渡された」

葵「うっそ、スカウトじゃんそれ！　陽斗なんて返事したの？」

陽斗「興味ないんでって」

葵「もうバカ！　せっかくトップアイドルへの道が開けたかもしれないじゃん！　そしたら私もDiVE（ダイブ）の櫻井くんとお近づきになれたかもしれないのに～」

と、がっかりする。

理子「でもスカウトされたってことは、きっと陽斗に何か光るものを感じてくれたってことでしょ？　なんか嬉しいなぁ」

陽斗「……もういいだろ」

と、葵から名刺を奪ってリビングを出る。

葵「あ、ちょっと陽斗！　それちょうだいよ

ー。いらないんでしょ？」

と、陽斗の背中に向かって叫ぶ。

○（陽斗の回想）同・陽斗の部屋

陽斗、ベッドに寝転がりながら名刺を見る。ガバっと起き上がってスマホでメールを打つ。

陽斗M「興味ないとか言ったくせに、結局俺は名刺に書いてあった孝弘さんの連絡先に連絡した。アイドルはどうでも良かったけど、その時はとにかくサッカーを忘れて熱中できる何かが欲しかった」

○（陽斗の回想）同・リビング（夜）

父・田中博（44）、理子、陽斗が机を囲む。

博の前には契約書の用紙。

博、腕を組んで難しい顔で陽斗を見る。

博「お前よりもっとすごい子がゴロゴロいる世界だぞ？　そんなところに入っても、埋

もれて苦しむだけだ」

陽斗「……それはそうかもしれないけど。やってみなきゃ分かんないじゃん」

と、譲らない。

理子「陽斗がやりたいって言うんだからやらせちゃダメ？　部活だと思えばそんなに変わらないわよ。まだ学生なんだから、先のことはその時に考えてもいいわけだし」

博「……勝手にしろ」

と、立ち上がる。

陽斗、ふーっと息を吐く。

陽斗M「母さんの口添えもあり、こうして俺はS・Sに所属することが決まった」

○（陽斗の回想）スタジオ・練習室（夜）

陽斗、柊也（16）、翼（16）、悠真（15）、凛太郎（15）がダンスの練習をしている。

全員汗だくになって息が上がっている。

陽斗M「事務所に入ってわりとすぐ、俺たち

は五人でユニクラウンというグループを結成することになった。メンバーはみんな同い年で、すぐに打ち解けられた」

翼「俺らいつデビューできっかな〜」

と、床に大の字に寝転ぶ。

悠真「意外と早くできるんじゃない？　自分たちで言うのもあれだけど、俺ら歌もダンスも結構イケてない？」

凛太郎「ささがそんなこと言うなんて珍しい！」

悠真「でも思わない？　機会さえもらえればさ！」

柊也「その機会を掴むのがひと苦労なんだけどな」

翼「そうなんだよなぁー！」

陽斗、メンバーの会話を聞きながら笑顔になる。

陽斗M「でも本当に、ここからが長かった……」

○（陽斗の回想）同・練習室（夕方）

陽斗「お疲れ様―」

と、入って来る。

柊也「お疲れ～」

鏡の前でダンスの練習をするメンバー。

陽斗M「来る日も来る日も練習。たまの仕事といえば先輩たちのライブのバックで踊ったり、ドラマのチョイ役をやったり。CDデビューの兆しは全くないまま、俺は高校三年生になっていた」

○（陽斗の回想）田中家・リビング（夜）

陽斗M「そしてそんな俺を見て、父さんはい加減しびれを切らしていた」

陽斗（18）、腕を組んで座っている博（47）の前に立つ。

博「もう十分だろ。部活は引退の時期だ。受験に専念しろ」

陽斗「父さんの言いたいことは分かる。実際、俺よりすごい人なんてたくさんいたし、自

分との差を痛感する毎日だったよ。でもこで諦めたくない！」

博「いいか。才能があればすぐにでもデビューさせる。つまり、お前たちはそういうことだ。頑張り続けても叶わない夢はある」

陽斗「でも頑張り続けなきゃ叶う夢も叶わない！」

博「（声を荒げて）いい加減にしろ！」

と、テーブルを叩いて立ち上がる。

陽斗「（落ち着いて）ちゃんと引き際は見極める。いつまでもダラダラは続けない。どうにもならなかった時のことも考える……だから続けさせてください」

と、土下座する。

博、陽斗から目を逸らす。

× × ×

キッチンでは皿洗いする理子（47）、

理子「お父さんもね、心の底では陽斗のことを応援したいのよ？　それだけは分かってね」

陽斗「……うん、分かってる」

陽斗、博の座っていた席を見つめる。

○（陽斗の回想）大学・キャンパス内

陽斗（19）、友達と話しながら歩く。

陽斗M「授業、レッスン、たまーに仕事。大学生になっても俺たちユニクラウンに大きな変化はなかった」

○（陽斗の回想）同・門の前

振袖やスーツの学生が集まる。

陽斗（22）、卒業式の看板の前に立って写真を撮る。

陽斗M「一年、また一年と、時間だけが過ぎていき、俺はとうとう大学も卒業してしまった。同級生はみんなちゃんと就職が決まっているのに、俺はレッスンや突然入る仕事があるためバイトすらろくにできず、親のスネをかじらせてもらうしかなかった。そんな中……」

○（陽斗の回想）事務所・社長室

ユニクラウンのメンバー、宮本の前に並ぶ。

宮本「よく頑張ったな。ユニクラウン、デビュー決定だ！」

メンバー、固まる。

後藤「五人とも、ここまでよく腐らず続けたな。おめでとう」

メンバー、混乱する。

陽斗、後藤（30）の方を向く。

後藤、笑顔で頷く。

陽斗の目に涙が浮かぶ。

メンバー、顔を見合わせて、

メンバー「ありがとうございます！」

と、宮本（47）と後藤に頭を下げる。

宮本と後藤、微笑む。

○（陽斗の回想）田中家・リビング（朝）

テレビのニュース。

キャスター「今朝四時解禁。S・Sエンター

テインメントより、ユニクラウンのデビューが決定！　デビューシングル『hello world』のMVが公開され、再生回数は早くも1000万回を突破しました！」

陽斗M「俺が23歳、事務所に入って七年目。ようやくユニクラウンのデビューが決まった」

○（陽斗の回想）テレビ局・楽屋（朝）

陽斗、鏡の前でヘアメイクをされている。

スマホにメッセージ通知。

〈博：おめでとう〉というメッセージと共にユニクラウンの巨大広告の写真が送られてくる。

陽斗、口角を上げて〈陽斗：ありがとう〉と返信。

陽斗M「俺の芸能界入りを最後まで納得していなかったはずの父さんが、一番に連絡してくれた。後から聞いた話だと、あの日仕

事の前にわざわざ会社とは方向が違う渋谷まで写真を撮りに行ってくれたらしい」

○宮本家・リビング（夜）

えま「陽斗くんもそんな時期があったんですね……」

陽斗「あったあった。俺のせいでしょっちゅう家の中ギスギスしてたと思う」

えま、唇をギュッと噛みしめる。

えま「……でも、パパもママもお兄ちゃんも知ってて、私だけ知らないって仲間外れじゃないですか？　同じ家族なのに……」

陽斗「そうだね。それは嫌だったよな」

えま「それに……それ以上に……」

陽斗「ん？」

えま、バッと顔を上げて、

えま「もし話してくれてたら……ユニクラウンの出してほしいグッズとかたくさん言えてたのに！」

陽斗「ちょっと待て。そっち!?」

えま「（真剣に）そっちってどっちですか！
大事なとこです！」
陽斗、フッと笑みをこぼして、
陽斗「ちなみに、グッズのことはぜひ参考に
したいから聞かせてよ」
えま「いいですよ！　まず私が一番出してほ
しいのが～」
類「楽しそうだねぇお二人さん」
類、ソファの後ろにしゃがんで不敵な
笑みを浮かべながら二人の間から顔を
出す。
えまと陽斗、ビクッと驚く。
えま「うわっ！　最悪！　脅かさないでよ！」
類「はい、近いですよー」
類、えまと陽斗を離す。
えま、面倒くさい顔をする。
えま「あぁ超ウザい！　陽斗くん部屋戻りま
しょ！」
えま、立ち上がって歩き出す。
陽斗も続いて立ち上がり、アイドルス

マイルを向けて部屋を出ていく。

類「コラ！　ちょっと待て！」

と、叫ぶ。

○同・リビングダイニング（朝）

宮本家と陽斗が朝ごはんを食べている。

美香「そういえば、今年はえまたちのクラスは文化祭何するの？」

えま「……縁日」

宮本「おぉ！　パパも遊びに行こうかなぁ」

宮本、えまの様子を伺いながら聞く。

えま「……派手な格好は絶対やめてね」

宮本「えっ……？」

宮本、涙目で美香を見る。

美香、にっこり微笑む。

えま、陽斗の方を見る。

陽斗、微笑む。

宮本「分かった！　保護者の中で一番地味な格好にするからな！　安心しろ！」

類「俺も行こうかな～」

えま「お兄ちゃんは絶対余計なことべらべら喋るからイヤ」

類「そんなぁ！　それは父さんだって変わんないだろ！」

宮本「いや、父さんは類と違ってやる時はやれる男だからな」

類「いーや。蛙の子は蛙なんだから、蛙の親も蛙だよ」

えま、呆れながら朝ごはんを食べる。

陽斗と美香、顔を見合わせて頷く。

○高校・校門

文化祭の立て看板。

保護者や他校の生徒が続々と門の中に入って行く。

○同・教室前

教室外の壁に大きく【縁日】と書かれている。

桃香「縁日いかがですか～」

桃香、法被を着て呼び込み。

宮本、美香、類が教室の前に来る。

美香「桃香ちゃーん」

桃香「えまのお母さん！」

美香「えま中にいる？」

桃香「いますよ！　今呼んできますね！」

美香「お仕事中にごめんね」

桃香、「えまー」と扉口から教室の中に向かって叫ぶ。

えまが出てくる。

えま「ママたち早くない？」

美香「実はゆっくりできなくなっちゃったから顔だけ見に来たの。ご飯のお金ある？

大丈夫？」

えま「うん大丈夫」

宮本、口を開くのを必死に我慢している。

桃香「ねぇ、後ろにいるのってえまのお父さんとお兄ちゃん？」

えま「あぁ……うん、そう……」

桃香「こんにちは！」

宮本「いつもえまと仲良くしてくれてありがとうね」

類「はじめまして、えまの兄です」

桃香「やばい！　お父さん超ダンディーだし、お兄さん超イケメン！　芸能人みたい！」

教室の中から生徒が集まって来る。

宮本と類、ニタニタする。

えま「はいはい分かった。来てくれてありがとうねー」

えま、宮本と類の背中を押す。

宮本「もうちょっといさせてくれよ！」

類「えま押すなってー」

美香「じゃあ、連れて帰るわね。桃香ちゃんもまたね！」

桃香「はい、また！」

えま、美香に手を振る。

美香、宮本と類を引っ張って行く。

○同・廊下

廊下を歩く宮本と美香と類。

類「ていうかアイツどこ行ったんだよ。もしかして迷子？」

美香「子供じゃないんだから大丈夫よ。連絡しておく」

と、スマホを出す。

○同・教室前

えま、三人の背中を見送る。

女子1「ねぇ、えまの家族やばいね！」

女子2「お母さんも綺麗だし、お父さんもお兄ちゃんもカッコよすぎ！」

えま「そんなこと言っちゃダメダメ。調子に乗って大変だから」

えま、女子と教室の中に入って行く。

○同・校庭

陽斗、マスクにカラーグラスをつけて帽子を被った姿。

出店で賑わう校庭に立ちつくす。

受け取った地図を指でなぞりながら歩き出す。

○同・廊下

すれ違う生徒が陽斗をチラチラ見る。

陽斗、気まずそうに歩く。

○同・教室前

陽斗、縁日の教室の前で足を止める。

桃香「縁日、楽しいですよ〜」

陽斗、呼び込みをしている桃香に近づく。

陽斗「……すいません。えまいますか？」

桃香、怪しんで陽斗を見つめ、目を見開く。

桃香「はいっ！　すぐ呼んできます！」

桃香、慌てて教室の中に行く。

通りかかる生徒がヒソヒソ会話しながら陽斗を見る。

陽斗、帽子を目深にする。

えまと桃香、走って教室から出てくる。

えま「（小声で）どうしているんですか!?」

えま、陽斗の手を掴んで端の方まで引っ張る。

陽斗「美香さんたちと来たんだけど。途中で見失って」

えま「（小声）ママたちもう帰りましたよ！

陽斗くんも早く帰ってください！」

陽斗「例の先輩に見せつけたいって言ってたじゃん？　せっかく来たし、彼氏のいない可哀想なえまのためにしょうがないから俺がその役やろうかな～って」

えま、目が点になる。

陽斗、えまの顔の前で手をかざす。

陽斗「おーい？」

えま「何言ってるんですか！　ダメですよそんなことさせられません！」

陽斗「俺、一応新人俳優賞受賞してるよ」

と、ニコニコしながらえまを見る。

えま、乗り気の陽斗を見て諦める。

えま「絶対にばれないようにしてくださいね

!?

何もしなくていいですから！」

陽斗、頷く。

女子が群がって来る。

女子1「えま、こちらのイケメンは？」

女子2「もしかしてえまの彼氏？」

えま、答えようとする陽斗のマスクの口元を押さえる。

女子3「なんか芸能人みたいだね」

えま、陽斗を隠すように前に立つ。

えま「違うの！　この人はただの親戚！　人見知り激しくて、陰キャで、普段は家からほとんど出ないから実は今日久々の外出なの！　特に女子が近づくと緊張で蕁麻疹でちゃうの」

一同「へ、へぇ……」

と、陽斗を見ながら引いている。

桃香、その様子を見てクスクス笑う。

えま「じゃあ、私この人案内しなきゃだから！」

陽斗「あ、ちょっ！」

えま、陽斗の手を握って引っ張って行く。

○同・廊下

走り去るえまと陽斗をこっそり盗撮する女子の姿。

ブレていてはっきりとは写っていない。

○同・グラウンド

えまと陽斗、手を繋いだまま出店の通りを歩く。

陽斗「で。誰が人見知りが激しい陰キャだって？」

えま、ギクッとする。

えま「だって、しょうがないじゃないですか！　全然隠せてないんですよ芸能人オーラを！　JKを舐めちゃダメ！　ああても言わないと絶対バレてました！　それに人見知りは間違ってないでしょ？」

陽斗「まぁそうだけど……」

陽斗、ふとえまに握られた手を見る。

えま、それに気づいてパッと手を離す。

えま「あっ、ごめんなさい……」

陽斗「あーいや……うん」

気まずい空気が流れる。

陽斗「あ！　俺アレ食べてみたかったんだよね！」

と、チーズハットグの店を指さす。

えま「いいです……よ……」

えま、店の方を見て固まる。

工藤が店に立っている。

陽斗、えまの顔を見て、

陽斗「もしかして、あれが元彼？」

えま、コクリと頷く。

陽斗「じゃあなおさら行かなきゃじゃん」

陽斗、店に向かって歩き出す。

えま「ちょっと待ってください！」

えま、陽斗を引き止める。

陽斗「なんで？　見せつけるんじゃないの？」

えま「……そうですけど」

○同・店の前

工藤「いらっしゃいませー！」

工藤、えまを見て驚く。

えま、軽く頭を下げて工藤から目を逸らす。

工藤「えま……」

陽斗、えまの手を握る。

えまと工藤が陽斗の方を見る。

陽斗「えま、これ二人で一緒に食べよ」

えま「あ、はい……うん」

陽斗「これ一つ下さい」

工藤「……400円です」

陽斗、工藤にお金を渡す。

工藤、会計をしながら

工藤「……隣にいるの、彼氏？」

えま「えっと……」

陽斗「（笑顔で）そう見えてるなら良かった」

工藤「……」

生徒「チーズハットグ一つお待たせしました」

と、えまに渡す。

えま「……ありがとうございます」

陽斗「ありがとうございます」

○同・休憩スペース

陽斗とえま、席に座る。

陽斗「えまも食べる？」

えま「……いや、私は大丈夫です」

陽斗「そっか」

と、食べ始める。

陽斗「さっき、すごい顔してたなあの先輩」

えま「はい……何でですかね」

陽斗「そりゃあ、」

工藤の声「えま！」

えまと陽斗、声の方を向くと工藤の姿。

陽斗、チーズハットグを置いて立ち上がり、えまの手を握る。

陽斗「行こ！」

えま「え？　行くってどこに!?」

走って逃げる陽斗とえま。

工藤、二人を追いかける。

○同・校舎内

陽斗とえま、人混みの間を走る。

陽斗、追いかけてくる工藤をチラチラ見ながら、

陽斗「結構しつこいな」

えま、息が上がる。

えま「ハァッ、ハァッ。陽斗くん速っ、待って！」

陽斗「じゃあ手離す？」

と、走りながら聞く。

えま、首を横に振って、

えま「……離さないでほしいです」

陽斗、笑顔で。

陽斗「了解！」

○同・教室内

陽斗とえま、空き教室の扉を開けて中

に入る。
椅子と机が並んだ静かな教室。
陽斗、窓際まで行ってえまの方を振り向く。
えま「？」
陽斗の顔がえまに近づく。
えま、反射的に後ろに下がろうとする。
陽斗、えまの後頭部に手を添えて自分に引き寄せる。
触れそうな距離で止まる二人の唇。
えま、息を止めて固まる。

○同・教室前
扉からえまと陽斗の姿が目に入る工藤。
陽斗、目線だけ工藤に向ける。
工藤「！」
工藤、目を逸らしてその場を離れる。

○同・教室内
陽斗「お、行った」

陽斗、ゆっくりえまから顔を離す。

えま、「はぁっ」と止めていた息を吐き出し呼吸する。

陽斗「どう？　うまくいったんじゃない？」

えま、切ない表情。

陽斗「どうかした？」

えま「いや……あの頃は本当に悲しくて悔しくて。絶対見返してやるって意気込んでたんです。でもいざこうして自分なりの仕返しをしてみると、思ったよりスカッとしないもんなんですね……結局怒りよりも悲しみの方が深いというか」

陽斗「そっか……」

えま「ごめんなさい！　陽斗くんに手伝ってもらったのにこんなこと言って！」

陽斗、首を横に振る。

陽斗「それくらい先輩のこと本気で好きだったってことじゃん。いい恋愛、してたんだな。いいねぇ、アオハルだ～」

えま「だといいな～！」

と、伸びをする。

陽斗「でもちょっと調子に乗り過ぎたな。ごめん！」

えま「いえ！　むしろありがとうございました。私もこれで吹っ切れました。それにしても、自然な演技だったな～さすが新人俳優賞！」

えま、ニコっと笑って歩き出す。

陽斗、えまの後ろ姿を見つめる。

陽斗「演技……」

と、呟く。

えま「陽斗くん？　どうかしました？」

えま、陽斗の方を振り向く。

陽斗「いや。なんでもない！」

と、えまの隣に行く。

えま「あれ。そういうえば陽斗くん。ハットグは？」

陽斗「そうだ！　さっきのテーブルに置いてきちゃった！」

えま「えぇ!?」

陽斗「急いで戻んなきゃ！」

と、走り出す。

えま「走んなくてよくないですか？」

と、笑って陽斗を追いかける。

えま、隣を走る陽斗の横顔を見て、

えまM「……今が一番アオハルですけどね」

（了）